

書評

外村彰著『近江の詩人 井上多喜三郎』

河野 仁 昭

地方で文学活動をおこなった人の研究があまり進まない理由は、その存在が目につきにくいということもあるが、より根本的には資料の問題にある。特に発表の場がほとんど同人雑誌であったり、著作が自費出版もしくは地方の零細な出版社から出たものであった場合、そういうものは極めて残りにくかったのである。各地に図書館や資料館、文学館などが整い、地元の人雑誌なども収集保存するようになったのはごく最近のことで、それも実施している所は多くないようである。日は東京とその周辺の著名人に向けられている。利用者がそうだからでもある。

文献や記録が頼りの研究者にとって、それを得がたいというのは致命的な問題である。遺族や、かつての同人雑誌仲間などを訪ね歩いて、時間とエネルギーを、徒労に終るかもしれない発掘に費やさねばならない。

外村彰氏の『近江の詩人 井上多喜三郎』を拝読して、なにもまして感銘ぶかったのは、外村氏による井上資料の発掘であった。あるいはその多くは、井上多喜三郎の長男で家を継いでい

る喜代司氏が、父の遺品として大切に保存しておられたのかもしれない。もしそうだったとしたら稀有の例といつてもよいことで、家が手狭で置き場所がないとか、子や孫にはそういうものに興味がなくして廃棄するといった例が多いのである。

喜代司氏が所持されていたにせよ、それだけではおそらく研究に十分とはいえず、外村氏は渉獵と収集におびただしい時間とエネルギーを費やされたに相違あるまい。井上のような地方で詩作活動をおこなった詩人について書かれた文献も、まことに乏しいのだ。つまり研究されていないのである。

外村氏のこの労作が出るまでの井上に関する文献といえば、井上の作品も含めて、コルボウ詩話会テキスト『コルボウ』（昭和24年8月創刊）、同人雑誌『骨』（昭和28年11月創刊）、そして昭和二十五年八月に井上らが中心になって発足した近江詩人会の『詩人学校』くらいなものであった。井上はわたしにとつても気になる詩人の一人だったから、断片的に数編あちこちに書いてきたのだが、それらはみな右の資料にもとづくもので、戦前のこと

にはほとんど言及するすべがなかった。

この外村氏の著書によって初めて知り得たことの一つだが、井上は大正十四年七月に詩誌『東方詩人』を創刊して以後、第二次『月曜』（昭和12〜15年）に至るまで詩誌を断続的に発行しているのだが、それらがすべて井上の個人詩誌である。なぜ個人詩誌だったのだろう。井上は詩や短歌、俳句を東京あたりの雑誌に寄稿したりその同人になったりしたことはかなり多い。詩作に対する熱情をうかがわせるに足ることだが、地元での詩活動といえはほぼ個人詩誌に限られている。

地元に向好の士がいなかったわけではない。外村氏によると、六条篤、小林朝治、高租保らと親交があり、これらの人は井上の詩誌にも深く関与していたようだが、井上は同人制をとっていない。

京都の天野隆一とは昭和初期から親交があったようである。天野は井上と同様モタニズム系の詩人で、大正十四年に同人詩誌『青樹』を京都で創刊し、東京の著名な詩人にも寄稿をもとめていた。親交があったにしても、井上はこれにほとんど関与することがなかったようである。誘いを受けなかったとは思えない。

井上が京都の詩人たちのグループに加わり、また同人として詩誌の創刊にかかわるのは戦後のことである。地元の滋賀でも共同で前記の近江詩人会を興す。戦後は個人詩誌を発刊しようとはしていない。たんに家計が苦しかったというだけのことではあるまい。

詩誌に関するこの戦前と戦後の違いに、井上の何が読み取れるかを断定する用意は今のわたしにはない。また、そのことが彼の詩的生涯において重要な意味を持つことか否かもなんともいいがたい。確かなことは、井上が独自の詩法を確立するのは戦後、それも同人詩誌『骨』創刊以降だということである。

戦前の井上はモタニズムに深く傾倒していた。それは昭和三十二年九月に出版した『抒情詩集』あたりまで、かなり顕著に認められる。例えば次の「野分の歌」がそうである。

コスモスの垣根徑をゆきすぎる少年でした

手にさげた水薬の瓶に

野分の歌がうつっていた

なぜモタニズムだったか。外村氏の著書を拝読しながら、これもあらためて思わざるをえなかったことの一つである。

詩人の出身地はさまざまであれ、モタニズムは端的にいって、都市生活者の感性がとらえた都会のメカニズムだと、わたしは思っている。都会的であり、反因習的であり、反土着的な詩であり芸術だといえるだろう。ところが井上は、戦争末期の軍隊生活と、戦後一年余のシベリア抑留を除いて、生涯、生地である湖東の村を出て暮らしたことがないのである。しかも外村氏が指摘しているように、「井上は都会をほとんど描かなかった。メカニク的な

近代文明を彷彿とさせる詩もない。「モダン」というには井上の詩は牧歌的にすぎるが、「ハイカラ」の称号には、田園モダニズム詩人らしい妙味がある（九十四ページ）というべき詩人であった。

わたしが井上に直接接するようになったのは、昭和四十一年四月に事故死するまえの五、六年、つまり晩年であった。そのわたしが記憶している井上のことばは、まる味のある柔らかな江州弁だった。商人だったから丁寧語が多かったようにも思う。天野忠は随筆「はんなり」に、井上が相手のことばにうなづくとき、「ほうや、ほうや」とやさしく首を傾げた、あの「ほうや、ほうや」と「はんなり」の語韻は「親類筋にあるような気」がしていると書いている。

いずれにしても、モダンではなかった。服装もそうだった。昭和二十九年、「骨」五号に、井上は自ら次のように書いている。

「服は三十年來着古したもので、春秋も冬も、その一枚でおし通している。（中略）夏は上衣を脱げばよいわけだ」

外村氏の著書には、青年時代の井上のハイカラな写真が数葉掲載されているが、普段はまったく違っていたはずである。素朴で土臭い郷土人形の収集が、若いときからの趣味の一つでもあった。

井上の生涯の親友であった田中冬二は東京育ちで、モダニズムの洗礼を受けた詩人だが、銀行員として長野県や福島県での生活が長く、しかもそうした地方都市での生活を「快適」だと感じていた。そのせいばかりではあるまいが、田中は抒情詩人として一

貫した。

その田中と極めて親密でありながら、井上はなぜモダニズムの詩法に固執したのか。これも詳らかにする手掛りがいまのわたしにはないのだが、そうした戦前の井上の詩について外村氏は、井上の秀作でも彼の独自性よりはむしろ北園克衛や岩佐東一郎らに追隨している面があり、「井上独自の方法が際立つ」という事があり「まりみられない」（八十八ページ）と書いている。そのとおりだと思ふ。

感情や思想を排して、感覚の新しさと比喩など技巧の新奇さを追うモダニズムの詩法で、个性的であることはむしろかたし。まして井上のような、おおよそモダニズムとは相容れそうにない田園での土着生活者にとつてそうである。そのことに井上は気付いていたかどうかはなんともいいがたいのだが、井上はかたくなであつた。

わたしのたんなる憶測にすぎないし、生得的な好悪の感情を抜きにいうのだが、井上にとつて詩作、それもモダニズムは、郷土人形の収集がそうであつたようにアソビだったのではないか。彼は「詩はわたしにとつて宗教だ」といつていたと外村氏は書いているが、アソビがたんなる表層的なものとはいえない。それは精神の支えともなるものであり、人生の同伴者ともなり得るものである。詩を作るより田を作れを信条とする農村で生計をたてていたにしては、井上はそうしたアソビを心得ていた人であり、そのことによつて過酷きわまる抑留生活にもよく耐え得たものではなかつ

たか。

働き者の父親が健在だったころには、井上の生家には店員が二、三人もいて、県下でも有数の呉服商だったという。井上はその店のほんぼんとして育ったのである。より以上に神戸の竹中郁がそうであったが、竹中にせよ井上にせよあくせくしないし、深刻な表情を見せることもなかった。戦後の窮乏期にも屈託したそぶりは見られなかったようである。おそらく心にアソビがあったからだろう。アソビが身についていたのである。

井上の晩年の詩は、暮らしやその自然環境とまったく齟齬のないものであった。気取りもなかった。彼が好んだ土の郷土人形の単純さとぬくみを、そしてたくまざるユーモアを備えていた。

井上はモダンイズムの詩精神を、風土や暮らしのありよう、どこか田舎びて土の臭いがする江州弁によって馴致したのである。それは外村氏も指摘していることだが、詩と実生活の一体化であった。

その時期の詩に「生」というのがある。一周忌に出版された詩集『曜』に収録されている。

たとえば蚕豆にしても

分厚い莢の中の

しつらえられたマッドレスの上に

行儀よく竝んでいる

さみどりのトルソーは中程がくびれて

こころもちそりかえり

黒いチャックなんかとりつけて
大事なところを守っている

蚕豆は蚕豆のかたち
まぎれもなく育っている

降りかかる光のかけらたちよ

麦藁帽子も知っている

蚕豆の木のひなびた子守うたが
くるくる太陽をまわすのを

井上はこのような詩を書いた晩年においても、地方の詩人は不遇だと感じていたかどうか、わたしは知らないが、彼はごく若いときから、そういうことをあまり意識していなかったように思えてならない。少なくとも晩年のこうした詩は、東京の詩壇や詩の傾向など意に介さない精神の所産であることはたしかだろう。

外村彰氏の『近江の詩人 井上多喜三郎』は、詩人研究の新たな可能性を開いた労作だと、わたしは思う。井上についてあらためて考える手掛かりを示唆していただいたということにおいても、感謝の意を表さずにいられない。

(ここの・ひとあき 本学文学部卒(エッセイスト))